

ルカによる福音書 1:57-66

クリスマスおめでとうございます。アドヴェントを迎えてから二十日あまり、指折り数えながら一日一日を過ごして参りましたが、その間、私たちと共にあったのが「主」というこの言葉でありました。このことはつまり、クリスマスが私たちにとって特別であるのは、「主」という言葉が私たちとピタッと張り付き、離れることがないからです。ただ、それは、私たちにとってはいつも通りのことであり、それゆえ、見方を変えれば、クリスマスとは、いつもと代わり映えしないものでもあるのでしょうか。けれども、それが私たちにとっての御子をお迎えするということなのです。なぜなら、クリスマスの本質は、この、いつもと変わらない、というところにあるからです。ですから、御子がお生まれになった幸いと恵みを今年も驚きをもって受け止めているのは目新しい、何か別のものに心を奪われているからではありません。私たちの元に届けられたものの中身はいつも通り、何一つ変わらないものなのです。けれども、この変わらないものを私たちは喜び、感謝し、そして、驚きをもって受け止めているのです。まただから、クリスマスの恵みと幸いはいつそうの輝きをもって私たちの心に深く響くことになるのです。

さて、ご存知のように、このクリスマスの幸いを世界中ではじめて経験したのが御子を迎えたイエス様の父母、ヨセフとマリアであります。それゆえ、御子の誕生を身体的に感じ取った母マリアの喜びはひとしおでした。1:47以下のマリアの讃歌がそのことを明らかにしてくれているわけですが、ただ、いざ事が成った時のマリアの気持ちはそれとは少し様子が違っていました。それは、御子の誕生の直後、羊飼いの訪問を受けたときのことで、御言葉が「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」と語るように、何かに逡巡しているかのように見えるからです。ところが、それにも関わらず、クリスマスの恵みと幸いは羊飼いたちと分かち合われることになったのです。従って、クリスマスの恵みと幸いとは、人と分かち合うべきものであり、分かち合うからこそ、その輝きはいつそう増し加えられることに

もなる。つまり、クリスマスの恵みと幸いとは、個人的な確信や満足に止まるものではなく、分かち合ってこそそのものだということなのです。

そして、この分かち合うという点において特に丁寧に語っているのがルカによる福音書でもありますが、それは、この丁寧さの中に、主という言葉が私たちとピタッと張り付いて離れない理由があるからです。ですから、ルカはいきなりイエス様の物語からはじめるのではなく、洗礼者ヨハネの父母の話からイエス様の物語を始めるのはそのためです。そして、そこから分かることは、イエス様が様々な人々との関わりの中で人の子としてお生まれになったということです。それは、そこに常に置かれていたのが主、つまり、主なる神様というこの言葉でもあるからです。ですから、私たちが毎年毎年こうしてイエス様のご降誕の出来事へと導かれているのは、同じように、主という言葉が生きて働いて、人と人とを繋ぎ、祝福から祝福へと導いてくれているからです。神様がイエス様に先立ってザカリア、エリサベトの夫婦を先ず選ばれたのはそのことを知らしめるためでもあります。そこでこの夫婦が選ばれた理由を申しますと、その一つは、この夫婦が「神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非の打ち所のない」人たちであり、また、ザカリアがアビヤ組の祭司であり、エリサベトが祭司アロンの家系に属する者であるように、家柄も人柄も申し分のない者であったからです。そして、もう一つ、子がなく、高齢であるこの夫婦の将来はそのことゆえに閉ざされていたからです。そこで神様に遣わされた天使ガブリエルはザカリアに向かってこう告げます。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。彼は主の御前に偉大な人になり、・・・イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる」とこのように語るのです。ところが、それを聞いたザカリアは、今の私たちと同じ気持ちで

この天使ガブリエルの言葉を聞くことができなかつたのです。それは、天使を見て「不安になり、恐怖の念に襲われた」からです。

ですから、ザカリアが天使ガブリエルに向かって「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」とこう言ったのは、不安と恐怖に駆られてのことです。ただ、初めて、ということ、経験がない以上そういうものだとも思うのです。けれども、それだけにまた、心の中に隠し続けてきたものがあふれ出てしまった。それは、過酷な現実がこの正しい人をしてその心を歪ませたからです。ところが、それにも関わらず、天使ガブリエルは、ザカリアに向かって「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。」と諦めずにこう語り続けるのです。ただし、それは、ザカリアを説得し、安心させようとしたからではありません。この言葉に続いて、ガブリエルが「あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかつたからである」と語るように、沈黙を強いることで、主というこの言葉が生きて働いていることを知らしめようとしたからです。ですから、神様の祝福というものは、時にこのように押しつけがましいものなのかもしれません。

しかし、一罰百戒がごときこのやり方は、今日を生きる私たちにはいささか乱暴な話にも聞こえます。けれども、外見からは分からないほど、心と体がすさみきっていたのがザカリアであったのです。ですから、その頑な心は少々のことではびくともしません。だから、沈黙を強いられ、ザカリアは見つめ、また聞いてゆくのです。それは、御旨がなる、ということ、主という言葉が共にあり、生きて働いているということ、ザカリアは日々沈黙の内にこのことを見つめ、また聴いて、そして、心と体で感じて取ることになったのです。ただ、新たな命を宿し、日一日と御旨が成ることを肌身で感じたその妻エリサベトとは違って、ガブリエルと会って以降五ヶ月もの間、ザカリアには具体的なことは何も知らされませんでした。そのため、ただ時間だけが過ぎる毎日を過ごさねばならなかつたのです。そして、この時間だけが過ぎてい

くという感覚は、もしかしたら、アドヴェントを過ごす私たちが時折感じるものなのかもしれません。けれども、私たちには気を紛らわせるものが他にいくらでもありますが、ザカリアは違いました。ですから、ザカリアが感じたであろう苦痛は、いつものことだと、そう言ってすませることができ程度のものではありません。また、それだけではなく、五ヶ月が過ぎ、お腹の大きくなったエリサベトが自分のもとに戻ってきたことは、ザカリアを複雑な気持ちにさせたようにも思うのです。なぜなら、そういったとき、人は、自分だけに光が当たっていないことを感じて、取り残されたような気持ちになるからです。ですから、今日のこの箇所に至るまで、ザカリアが一切登場しないのはそこに理由であるようにも思うのです。つまり、喜びつつも喜べない、ですから、もしかしたらザカリアはそんな醜い自分自身と向き合っていたのかもしれない。けれども、私たちにとっての祈るという行為は、時にそういう気持ちの中でのことなのではないでしょうか。語るための言葉、語るべき言葉、言葉を持たないまま祈るということはそういうものであり、そして、私たちの切実な祈りの多くはそういうものでもあるのです。

しかし、そうであればこそ、沈黙を強いられたザカリアにとって、この祈りこそが、祈ることだけが唯一の友であったようにも思うのです。祈り、自分の気持ちだけがその心の中で響いてぐるぐると空回りし、そして、その残響が静まるのを待って再び祈る、ザカリアにとって、御心が成るまでの十月十日はそのような日々であったに違いありません。そして、時は満ち、御旨は成り、一人の男の子が与えられた、こうしてザカリアとエリサベトは神様の働きを深く知ることになったのです。まただから、この喜びは、親類縁者、近所中の人々と分かち合われることにもなったのです。ですから、天使ガブリエルが「この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現する私の言葉を信じなかつたからである」と語ったことは、子のない高齢夫婦に子が与えられた、まさに今この瞬間のことだと思ふのです。ところが、ザカリアが話せるようになったのは、子が生まれたその時ではなく、それから八日後のことであったのです。従って、ザカリア夫婦にとって、この八日後が、ガブリエルの告げた神様の御旨の成った日ということになる

のですが、では、この空白の八日間は彼らにとってどういう意味を持つことになったのでしょうか。それは、すべて事が成ったわけではない以上、大きな喜びの背後にある、それ以上大きな影を見つめながらの八日間であったということです。

従って、一つのことが成り、この夫婦に残されたものはただ待つことだけでした。そこで彼らは神への信頼を深くしたのか、それとも不信を強めていったのか、御言葉はそれについては何も語らず、ただ沈黙を貫くだけなのです。それは、神様の御心は子のない夫婦に子が与えられたところで終わってはいないからです。つまり、八日間、御言葉が沈黙を貫いていたのはザカリア、エリサベト夫婦をこの先に導くためであったということです。そして、そのために必要なことは、主が生きて共にあることを経験することです。ですから、八日間は空白の八日間ではなく、二人にとっては、神様の働きを経験的に知るための豊かな時間であったと言えるのです。まただから、大きな喜びの背後にある、それ以上大きな不安と恐れを感じつつも、主が共にいてくださっていることをザカリア、エリサベト夫婦は知ったのです。ですから、二人のこの大きな経験は、この夫婦の子どもである洗礼者ヨハネにも間違いなく受け継がれていったに違いありません。それは、家族として歩む日々の暮らしが、つまり、父と母と一緒にいることが、主が共にある経験を必ずや深めていったはずだからです。主という言葉が洗礼者ヨハネから人の子であるイエス様へ、イエス様から私たちへと、イエス・キリストという、神様が備えたこの新しさの中へとすべての者を導くのはそのためです。しかし、それを知るには、それを知らしめるための新しい何かが必要なのです。そして、そのために神様のなさったことは非常に慎重かつ丁寧なものでありました。

男の子の誕生から八日後、親戚や近所中を招いて割礼を施すというのがイスラエルの決まり事でありました。そして、もう一つ、彼らが習慣としていたのは親類縁者の前で命名式を行うということでした。しかし、その子の名前は、父親と同じ名前とはじめから決まっていたのです。ですから、夫婦に与えられた新たな命は、ユダヤ社会の決まりに従うなら、その名はザカリアということになるのですが、ところが、話すことのできないザカリアに代わって妻エリ

サベトの言ったことは、「ヨハネにしなればなりません」ということでした。しかし、エリサベトのこの発言はユダヤ社会に背を向けるに等しいことでもあったのです。だから、それを聞いて親戚も黙っているわけには参りません。それを認めることは、大袈裟な話、蟻の一穴天下の破れと言われるように、神の民イスラエルの存亡に関わるものでもあったからです。「あなたの親類には、そういう名の付いた人は誰もいない」と言って、親類縁者が必死になって止めにかかったのはそれゆえのことでもあります。ただ、エリサベトは単なる思いつきでそう言ったのではありません。それは、天使ガブリエルから命じられたことであり、口のきけないザカリアに代わって言わねばならないことだからです。それだけにまたその必死さが親類縁者にもしっかりと伝わったのでしょう。そこで彼らが父親であるザカリアに身振り手振りで尋ねたところ、差し出された板にザカリアは「この子の名はヨハネ」というこの言葉を書き記したのです。するとどうでしょう。「たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を讃美しはじめた」というのです。つまり、この瞬間、御旨が成ったということです。

こうして、また一つ、神様の御心が実現し、救い主としてのイエス様の生涯の輪郭が世に露わにされていくことになったのですが、ですから、私たちが御子の誕生の出来事のそこにかしこに、様々な人々の顔を見ることが出来るのは、御言葉がこのように一つ一つ丁寧にプロセスを辿っているからです。だから、この一つ一つというところに、神様の御旨が成ることの丁寧さと、そして、ユダヤの流儀を無視するかのよう一気に大きく舵を切るのではなく、一つ一つ付き合っているところに神様の慎重さが現れ出ているようにも思えます。というわけですから、神様は無理なことはなさいません。乱暴に見えるのは、私たちのことを手塩にかけて何とかしようと思っているからです。御言葉が洗礼者ヨハネについて「この子には主の力が及んでいたのである」と語っているのは、このように神様の丁寧さと慎重さを伝えようとしてのことなのです。従って、御言葉が「主の力が及んでいる」と言っているのはヨハネだけのことを言っているわけではありません。ヨハネがイエス様につながったように、イエス様と繋がり、主というこの言葉がピタッと

離れずにいることを知っている私たちも、それは同じなのです。

ただ、このことはまた、見方を変えれば、しつこいだけで、ありがた迷惑な話なのかもしれません。頼んでもいないのにどこまでもどこまでもついてくる、そういう鬱陶しさがあるからです。けれども、だからこそ、詩篇 23 編の御言葉は「命のある限り、恵みと慈しみはいつも私を追う」と、自らの経験的として神様について語るのです。それは、ザカリア、エリサベトの夫婦、ヨセフとマリアの夫婦がそうであるように、主という言葉がピタッと離れずどこまでもどこまでも私たち共にあればこそ、この恵みを経験的に知り、また分かち合うことになるからです。ですから、そういう意味で私たちは主という言葉に分かち合うことに尻込みしてはなりません。この日の御言葉の直後で、沈黙の内に御旨が成ることを経験をしたザカリアが、その我が子の将来について「暗闇と死の影に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く」と預言しているように、主という言葉の上に立って、御言葉を分かち合うからこそ、私たちはその先に「主の平和」を見出すことになるからです。ただし、そこでこの分かち合うということを私たちは誤解してはなりません。

分かち合うということは、一緒にということであり、共にということなのです。そして、それは、主と共に、主と一緒にということでもあるのです。ですから、当然、それは、権威を振りかざすことでもなく、また、社会通念として受け入れがたいことを無理矢理強制するものでもありません。特に、私たち信仰者はこの点を深く心に留める必要があるのでしょうか。それは、長くユダヤ社会が大切にしてきたものを、神様が無理矢理変えようとするのではなく、丁寧に慎重にことを運んだように、この丁寧さと慎重さが私たちに求められているからです。ただし、この丁寧さと慎重さはそれを逆手にとって何もしないということではありません。丁寧さと慎重さとは、自分自身が傷つくことのない場所に身を置いて、自分以外のことには何も関心を示さないことではないからです。それは、私たち一人一人のことをしっかりとご覧になって、その上で私たちと共にいてくださっているのが私たちの神様であるからです。ですから、最後に考えたいことは、言葉が生きて働いているということがどういうことかという

ことです。

神様の言葉が、神様の独り子であるイエス様が、生きて私たちと共にあるということは、この生きていうことを私たちが日々肌身で感じながら過ごしているということです。神様が乱暴な方ではなく、丁寧で慎重な方であると言えるのは、そうした日々の経験あつてのことなのです。まただから、私たちは傷つき、また慰められもするのです。そして、御言葉が生きているがゆえに傷つき、頑なになり、心を歪ませていったのがザカリアでありました。それだけではありません。傷つくことを恐れ、御心から逃れようとしたのがイエス様の父ヨセフでもあつたのです。そして、この二人の父親に更なる深い傷を負わせたのが神様であつたのですが、けれども、話はそれで終わったわけではなかったのです。イエス様がお生まれになり、そのイエス様が十字架にかかり、復活なさつたということは、私たちには分からないこの先があり、そして、そこに希望の内に私たちを導こうとして神様とイエス様が共にいてくださっているということなのです。ですから、クリスマスとは、それが揺るぎなく、そして、この神様の御心が変わりようもないことを私たちに告げ知らせる出来事であつたのですが、けれども、この揺るぎのなさ、時に私たちを深き淵に立たしめることにもなるのです。しかし、そこで忘れてならないことは、神様の独り子であるイエス様というお方を神様はその私たちのためにお遣わしになつたということです。それゆえ、今もそしてこれからも、このお方ゆえに私たちは永遠の安息の内に置かれているのですが、それは、私たちが主という言葉が生きて働いていると本当に知るのが、イエス様が私たちと共にあるこの場所であるからです。ですから、この言葉がピタッと張り付いて、変わることなく離れずにある、御言葉が語るこの真実を心にしっかりと刻み、粘り強く、時にしたたかに、この、主と共にある新たな経験をご一緒に分かち合いたいと思うのです。祈りましょう。